■靖国を問う　３

自衛隊幹部の靖国参拝と靖国合祀

松岡　勲

はじめに

今年一月一二日、毎日新聞では、航空事故調査に携わる「航空事故調査委員会」の幹部らが同月九日に靖国神社を参拝したことを報じた。その後、「靖国神社宮司に元海将」とも報じ、「新しい靖国神社宮司に元海上自衛官の大塚海夫氏（63）が四月一日付で就任することが分かった。自衛官出身の宮司は松平永芳氏以来、二人目。」（中外日報、三月一五日）という。

これらの記事を見て、私には自衛隊と靖国神社の親和的関係が強く印象に残った。それとともに、今回の自衛隊幹部の靖国神社参拝は、今後に起こりうる日本有事（戦争参加）で自衛隊に「戦死者」が出た場合、その靖国神社合祀を狙っているのではと強く懸念した。

元陸上幕僚長であった火箱芳文は、日本会議の機関紙『日本の息吹』（二〇二三年八月号）の「国家慰霊追悼施設としての靖国神社の復活を願う」というタイトルで、「自衛隊の戦死に備えて靖国神社を国家の『慰霊追悼施設』としての靖国神社復活をさせ、近い将来国を守るため戦死する自衛官が生起する可能性を否定できない。我が国は一命を捧げる覚悟のある自衛官たちの処遇にどう応えるつもりなのか」と問いつつ、「筆者（火箱）ならば靖国神社に祀ってほしい、靖国神社を国家追悼顕彰施設として復活させ、一命を捧げた自衛官を祀れるようにする制度の構築が急がれる。」と主張している。

私の脳裏に蘇ったのは以前に靖国神社付属の戦争博物館の遊就館（ゆうしゅうかん）で見た「御羽車（おはぐるま）」だった。

御羽車

私が靖国合祀取消訴訟に一年遅れで参加したのが二〇〇七年八月だった。訴訟に合流直前の同月に靖国神社を訪れ、父・松岡徳一の合祀取り消し（霊璽簿（れいじぼ）からの父の名前の抹消すること）を求めて靖国神社をおとずれた。

私が靖国神社を訪れたのは二度目で、一度目はその時からさらに五〇年前の大阪府の靖国神社遺児参拝の時だった。二度とも額の汗を拭いながら大鳥居を潜った。夏の暑い盛りだった。

靖国神社再訪の帰途、靖国神社付属の戦争博物館である遊就館を見学

した。遊就館の展示に私の身体全体が拒絶感を表した。気味が悪かったのは、「招魂式」（招魂される戦死者の「みたま」を本殿に遷す儀式）に霊璽簿（新しい戦死者の名簿）を乗せる「御羽車」だった。照明を落とした室内のうす暗がりのなかに置かれていた。

御羽車を見て、招魂祭の日の深夜に、誰も見ていないなかをおごそかに戦死者の御霊を本殿に遷す風景を想像した。「うちの父（の名前）もこれに乗せられたのか。」「こんな形で「神」にさせられたまらないな。」と背筋が寒くなった。

靖国神社に「合祀」された父に対して、私の人生ではじめて真剣に向き合えた一瞬だった。たったひとりの息子が誕生した瞬間に戦地に送られ、戦地よりわが子の誕生を喜ぶ軍事葉書しか送れなかった父・・。私がはじめて父の存在に実感を持てた一コマだった。その時、早く合祀を取消し、父を私のもとに取り戻したいと切に願った。残念なことにそれは今も実現していない。

一九五〇年代の靖国神社遺児参拝

私の父・松岡徳一は一九〇九（明治四二）年大阪府に生まれ、一九二四（大正一三）年に高等小学校卒業、卒業後は農業（小作農）と大工を兼ねていた。一九三七（昭和一二）年に一回目の召集（陸軍工兵）、一九四四（昭和一九）年に二回目の召集をされ、一九四五（昭和二〇）年一月に中国湖北省漢口近くで戦死した。

一九五〇年代には戦没者遺児による靖国神社遺児参拝が全国的に行われた。大阪府の事例を調べると、一九五二年にサンフランシスコ講和条約発効記念事業の一つとして遺児参拝が始まっていた。この後一九五九年の第一四回まで続いた。一九五七年までは春秋年二回の参拝が行われ、私の参加した第一三回の遺児参拝が一九五八年夏で、一九五八年から年一回に変わっている。一九五七年までの春秋二回の参拝の参加人数の合計は、初年度の約五四〇名から始まり、一九五七年には一〇〇〇名強に増大、年一回の参拝になった一九五八年には一度に一〇〇〇名近くも参加していた。私の場合、父の靖国神社合祀が一九五七年で、遺児参拝は一九五八年だった。

大阪府では所要経費の負担は、初年度の場合、「一人宛参拝諸経費の補助として二千円（その範囲において実施する）」「全額府において負担」となっている。なお、これと別に一九五三年七月から戦没者遺族の靖国参拝のために国鉄（現ＪＲ）乗車券の五割引の制度が始まっていた。割引分の運賃は国で負担した。

実施要領は「（遺族）連盟の委託事業として運営に関しては連盟に委嘱する」となっている。また、参拝する遺児は「靖国神社合祀済者の遺児に限る」「各支部長の推選するものとする」となっており、期間中は「修学旅行に準じた取扱いをする」（大阪教育長通知）とし、出席扱いであった。また遺児参拝は大阪府遺族連盟（後に大阪府遺族会と改称）への委託事業だったが、大阪府民生部世話課が実務を担当した。

靖国遺児参拝については全国的にも行われていた。当時の遺児参拝の記録はいずれの県も『靖国文集』として残っている。そのうち確認出来たものは、北海道、岩手県、福島県、茨城県、富山県、大阪府、広島県、鳥取県、島根県、長崎県である。どの文集も『靖国の父を訪ねて』という同一のタイトルであり、全国的に同一歩調で遺児参拝が行われたことが分かる。遺児参拝は一九五二年に始まり、一九五九年に一巡して終わっている。

一九五〇年代は朝鮮戦争があり、アメリカ軍による日本の再軍備化・自衛隊の創設が進められた時代であり、ひとつ間違えば、日本は他国との戦争へと向かうかもしれない戦争の危機の時代だった。そうなっていれば、戦争遺児たちは再び銃を持たされ、戦争へ動員されていただろう。そのような政治状況で靖国遺児参拝が行われた。

私が参加した一九五八年の第一三回参拝の『靖国文集』（第一二集）によると、行きも帰りも夜行列車による三泊四日の旅だった。靖国神社参拝は二日目の朝に旅館で少し休憩をして、午前八時に靖国神社の境内に入り、遺児たちは靖国神社の深閑とした雰囲気に飲みこまれる。そして、本殿に昇殿して、祝詞の声が響き、玉串を捧げる神事が続く。神官が「さあ、あなた方たちのお父様と無言の対面です。心おきなく存分にお話しください。」と遺児達を促し、柏手を打つ。後日に書かれた遺児たちの感想文には、本殿の大鏡を覗くと、「お父様の顔が映っているようで」「知らぬ父の顔が現れて来たような気がした。」等の表現が散見される。さらに「この靖国神社は、お国のためになくなられたあなた方のお父さんや、お兄さんの英霊がお祀りしてあります。此国がある限り、あなた方のお父さんの名は後々まで残るでありましょう。」と宮司の話が続く。父のいない悲しさと寂しさをずっと抱えこんできた子たちは、戦死した父の死の意味づけをこのようにして聞かされた。

私は『文集』の最後に次の様に書いている。「八月一日午後一時過ぎ、多数の方々に迎えられて天王寺駅に到着した。（中略）しばらく行くと、僕たちと同じ年頃の男の子が、この暑い中で靴を磨いている。そうだ、僕には母もいる。父も見守っていてくれている。もっともっと強くなり、鍛え、みがき、立派な社会人となり、母を連れて靖国神社を訪ねよう。君たちもガンバレと気持ちを新たにしてその場を去った。」

今読み返すと、行政当局や遺族会が靖国遺児参拝で狙った意図に完全に絡め取られた認識だった。私の向こう側にいた靴磨き少年に対して、「上から目線」（一種の「選良意識」）で見ていたのだった。あの少年たちはどのような社会的背景をもち、どのような生活をしていたのか、とても知りたい思う。

大阪府の「靖国文集」を読む

大阪府の遺児参拝文集を読んだ。父や兄たちの広大な戦場、母子たちの戦後の生活、遺児参拝の様子、静かであるが湧き上がる子どもたちの怒り等を感じた。そこには戦後も「少国民」とされた遺児たちの姿があった。文集には、子どもたちの当時の生活と心情がよく現れている。

《母子たちの戦後》

●「私が誕生した時父はすでに戦場へ行っており、その年に死亡したので、私は父の顔を知らない、もちろん思い出もない。幼い頃の私には、友達が父と歩いている姿を見ていじらしく目につき、うらやましく思った事も幾度かあった。戦争で父を失った私は、戦争の事聞きたくない。母もきっと太平洋戦争の事は云いたくないだろう。なぜならば私がもの心ついてから今日まで、母は私に戦争の事を何も話さない。そして父の事ですら口に出さない。」（『第一〇集』大阪市西淀川区、女子）

●「ぼくには父、母、おじいちゃんがいない。しかしおばあちゃんがいるからいい。ただ父のある友達がうらやましい。（中略）もし戦争がなければ、無言の父ではないし、母もいるだろう。父、母がほしい。しかし今はおばちゃんに育ててもらっているが、昨年まではおじいちゃんが

いたが、きょうしんしょうで亡くなった。ぼくは今におばあちゃんを楽にしてあげ、父より偉い人になるのだと決心した。」（『第一二集』大阪市西区、男子）

●「母は昭和二十六年六月二十九日、父の帰りを待ちこがれ、その間の疲労と苦労の為に長い病床につき、この日私達三人を残して病死しました。祖母も我が子の帰りを待ちこがれ、いく日泣いて暮らした事か。我が子の戦死を聞いた時どんなにびっくりした事か。その為に祖母はあまりの驚きに元気な体も一度に弱った事であった。こんな思いをした祖母は老衰の為この年の八月二十四日に死んでしまった。父も母も祖母もない私達兄弟三人が立派に成長する事を父にもう一度誓った。」（『第五集』大阪市阿倍野区、女子）

《遺児集団参拝はこのように行われた》

●「大きな鏡の前に私達一同は座った。此の鏡の中にお父さんが居る。私はじっと鏡をみつめていた。「お父さん」と、小さくよんだ。目頭があつくなってきた。あつい涙がほほをつたった。鏡がくもって見えなくなった。」（『第五集』大阪市東住吉区、女子）

●「私も顔さえしらない父の霊に心の中で「お父さん！」と叫びながら足の痛いのも忘れ一生懸命祈った。ああ父はあのみにくい戦争の犠牲になった。しかし父は国の為に尽くし、国の為に立派に死んでいった。当時はそれは正しい立派なことであった。そして父もそれを正しい立派な事と信じて立派にこの世を去った。私はその立派な父の子である。誰にもひけをとる事はない。いやそれどころではなく国家の為に尽くした立派な父を持つ事を誇りとし、その父の子としてはずかしくない行いをしなければならない。」（『第一集』岸和田市、女子）

●「母の話に依ると僕の五歳の時、父は戦争に行かれたそうだ。その時僕はこんなことを言ったらしい。「お父さん、戦争に行ったら鉄砲の玉があたって、死んでしもてや、死んじゃったかてかめへん、神さんになってやもの」と。」（『第一集』豊能郡、男子）

《静かであるが、湧き上がる子どもたちの怒り》

●「父は私の三才の時に亡くなりました。（中略）私は父とそっくりだそうです。お母さんから、お父さんの顔が見たかったら、自分の顔を鏡に映して見ればよいといわれるくらいです。無口な所、性質等もよく似ているそうです。父が戦場に行く日、私は母にだかれて、どんなに泣いた事でしょう。幼かった私にも父の行き先がわかっていたのではないでしょうか。「お父ちゃん、お父ちゃん、行っちゃいやだあ」。何となだめられても私は泣きつづけていました。けれども父は、汽車の窓から日の丸の旗をふって私から遠ざかって行ってしまいました。戦争はようしゃなく幼い私の手から愛する父をうばい去ってしまいました。私は戦争がにくらしい、戦争がおそろしい。戦死された父や多くの人々は、もう二度と戦争が起こらないよう願っていられるでしょう。私だってこのよう不幸が起こらないように願っています。」（『第五集』大阪市旭区、女子）

●「僕の父が一体どこにいるのだ。健康な姿はどこに行ったのだろう。ただ大きな鳥居。門の様に閉ざされた（＊本殿）正面の板戸、とりまくすべてがなつかしい父と僕との間を閉じている様である。僕は誰にともなく無性に腹が立った。畜生、誰が父を殺したんだ。世界中で唯一人しかない立派な父を誰が海底に沈めたんだ。僕は無我夢中だった。辺りに誰が居ようが居まいが、おかまいなしにくやし涙がとめどもなく頬を伝

った。然しこの相手の無い僕の憤りはすぐに云い知れぬさびしさに変わってしまった。広い靖国神社の玉砂利の中に、僕一人ぽつんと取り残されたようなさびしさだった。（中略）鳥居の所まで出た僕は、わすれ物に気が附いて二、三歩引き返し、しゃがんで下の玉砂利を一にぎりポケットに入れた。」（『第五集』南河内郡、男子）

国家の嘘を見破った少女

分厚い『文集』（第二集）を読み進めるうちに一人の少女の文章を見つけた。それは河上孝子さんの文章だった。最初、靖国神社参拝前日の区役所での区長の激励の辞に対して、彼女は根源的な批判を書いている。

「犠牲は美しい行為である。しかしそこに意志が伴いて初めて美しいと言えるのであって、犠牲の気持ち無くして死んでいった者に、結果からみて犠牲の名で呼ぶのはかえって侮辱になりはしないか。父は召集令状、赤紙一枚によって操り人形と化され、別れたくもない親、妻子、知人との別離を命ぜられ、且つ犠牲の美名のもとに死をも命ぜられたのだ。私は靖国参拝を喜ばしい事とも、目出たい事とも思わぬ。こうした日を与えられた私を不幸と悲しむ。」

また、参拝当日の靖国神社本殿での神主の話に対しても、決して動揺することなく、父の死が英霊として意味づけられることを拒絶していた。

「『もう沢山』と叫びたいのを押えながら、すすり泣きの聞える中を、私は終わりまで神主さんの顔を凝視してやめなかった。『寒い凍れるような雪の中、夏は太陽の下で国の為に雄々しく戦い死んでいかれたあなた方のお父さま』。何と白々しい意志を持たぬ言葉だ。この飾りたてられた言葉が、幾千人の遺族に向って語られたことか。おそらく神主さんの頭の中にその文章は暗記され、明確に覚えこまれていることと思う。明日も明後日も、遺族に向かって語られるだろう。私はそんな安っぽい話なぞ聞きたくはない。私にとって父の死は、もっともっと厳粛な、そして寂しさと恐しさを持って存在するのだ。私の体の二分の一は父によって形造られたのだ。神主さんの話にすすり上げた人達は、話の何処に心ひかれたのか、私には理解し難い。本殿を下りながら、初めて私は悲しい気持ちになったのだ。このような反問の連続と、もろもろの感情を私に与えて靖国神社参拝は終わった。」

この文章を読んだとき、一九五〇年代に中学校三年生でこれだけの文章を書いた人がいたことに何よりも驚いた。この靖国文集に八二五人が感想文を書いているが、彼女の文章は同世代の文章群のなかで飛び抜けて鋭い視点で書かれている。それと較べれば、私の文章なんかは主催した行政や遺族会の期待に応えるものだった。なぜ、当時の同世代の私たちと違い、彼女はどうしてこのような文章が書けたのだろうか、彼女はどんな人だったのだろうか、当時の彼女の思いはどのようなものだったのだろうか、どのような家族と暮らしていたのだろうか、その後、彼女はどのような人生を歩んで来たのだろうかと、疑問が大きくなってきた。ぜひ彼女に会って、話を聞いてみたいという気持ちが強くなってきた。私のなかで彼女への憧憬が日ごとに大きくなっていった。こうした気持ちに動かされて、私の「幻の少女探し」が始まった。

幻の少女を探して

彼女の手がかりは出身中学校が「大阪市立夕陽丘中学校」で、今の時代には考えられないことだが（現在では個人情報保護を理由に住所等は表記されていないのが普通である）、当時の文集には筆者の住所表示があった。彼女の住所は「天王寺区堂ヶ芝町三四」だった。しかし、現在の町名は同じ堂ヶ芝町でも「一丁目」「二丁目」になっており、旧番地のままではない。それで、大阪府立中之島図書館に当時の「住宅地図」があることを知り、その「昭和三五年版」「昭和四一年版」などを調べた。地図には「堂ヶ芝町三四」の表示の箇所があったが、「河上」の名前がなかった。

そこで、桃谷近辺を調べることにした。彼女の住んでいた場所は「住宅地図」では環状線桃谷駅のすぐ前あたりのようだった。半日彼女の消息を訪ね歩いたが、桃谷界隈はビルディングが立ち並び、一九五〇年代頃とはまったく様変わりしていて、彼女が住んでいた場所は見つからなかった。

困り果てて、彼女が卒業した大阪市立夕陽丘中学校を藁をもつかむ思いで訪ねた。中学校では教頭さんが懇切に対応してくださり、「夕陽丘中学校同窓会」につないでいただけた。同窓会会長さんの紹介で、やがて彼女と同期の同窓会（一九五九年三月卒業、第一〇期）幹事さんと会員さんたちに連絡がつくことになり、大変親身になって、相談にのっていただいた。

同窓会の幹事さんに同窓会名簿に当たってもらったが、「平成一六年の同窓会名簿」で彼女は「逝去」とあり、それ以前に亡くなられていることが分かった。私が靖国神社合祀取消訴訟に参加する前にすでに彼女は亡くなっていた。そのことを知って大変落胆した。その後、同期のＭさんと連絡がついた。Ｍさんの話では、夕陽丘中学校卒業後の十数年後に第一回の同期会を行ったが、その時にすでに「逝去」との引き継ぎがあったとのことだったので、彼女は二〇歳代後半に亡くなっていたのだろうと想像できた。しかし、いつ頃どのように亡くなられたのか、つきとめることができなかった。Ｍさんからは貴重な「卒業記念アルバム第一〇期　大阪市立夕陽丘中学校」をお借りすることができ、彼女の写真を確認することができた。さらに「靖国文集（第一二集）」に載っている彼女の写真も確認できた。

Ｍさんとお話したなかで分かったことは、彼女の住んでいた場所は「ひさや」という旅館だった。当時の「住宅地図」の「堂ヶ芝町三四」に旅館が確認できた。彼女についてのＭさんの記憶は「とてもしっかりしていたが、どこか暗く、友達との関係はうすかった」とのことだった。同窓会の元幹事さんも、「先生にもはっきり意見を言うしっかりした子で、私なんか足下にも及ばなかった」と語り、私にはどこか孤立した孤高な姿が思い浮かんだ。なお、当時の夕陽丘中学校は市内有数の有名校で、「越境校」だった。当時の生徒は近鉄沿線の奈良、八尾方面から越境通学していたそうで、一学年七〇〇名もの生徒数で、現在天王寺区に住む同期の同窓生数は一〇〇人程度しかいないと、同窓会元幹事さんは語った。環状線を挟んで、その内側に夕陽丘中学校校区の高級住宅地、外側に在日韓国・朝鮮人の集住地があるという社会環境を背景に彼女は育ったのだろうと想像した。

彼女には弟さんがいた。弟さんは彼女と同学年で、姓はちがい、河野Ｓさんだった。事情は分からないが、河上さんのお母さんとＳさんのお父さんが同居され、それぞれ連れ子であったのかも知れない。そこには戦後の複雑な社会事情が垣間見られる。

このようにして彼女は二〇歳代後半に亡くなったと分かった。弟さん

にお会いして、彼女がどのようにして亡くなったのか、彼女のこと、彼女の家族の歴史のこと、また彼女がなぜあのような根源的な文章を書くことができたのか知りたかったが、その後も残念ながら弟さんは見つからないままだ。

「うちのお父ちゃん、向こうで人、殺しているはずや」

高校一年生になったばかりの時、当時の皇太子（現上皇）と正田美智子さんとの結婚パレードがあった。やっとわが家にもテレビが入り、テレビ中継を見ていた。皇太子夫婦が乗った馬車が写っていた。そこにひとりの少年が投石をし、馬車にかけよったのが見えた。テレビ中継を見ていた私は、内心で「やった！」と叫んでいた。少年は馬車に飛び乗ろうとしたが、警備の警官に取り押さえられた。

それから少し後のことだった。高校の屋上から茨木市の町並みを眺めていた。不意に「この屋根の下には、生きていると父と同じ歳頃の人たちがいるはず。」という想念が浮かんだ。息せき切って走って帰って、その思いのうちを真っ直ぐに母、春枝にぶつけた。

「お母ちゃん！うちのお父ちゃん、戦争に行ってるんやから、向こうで人、殺しているはずや。」

母は裁縫していた手を止めて、私の言葉を撥ね返した。母の顔は真っ青だった。

「うちのお父ちゃんは、虫も殺さんええ人やったから、絶対そんなことあらへん！」

その言葉に私は返すことができなかった。

当時、私の言葉をそのまま受け止めてくれると思っていた。しかし、高校生になった息子から突然発せられた問いに、母は内心は大変な動揺を感じただろうが、到底肯定することもでなかったのだろう。

私はゆっくりとした歩みだったが、父が殺す側にいたという認識を持つようになった。しかし、その後、母から拒否された「父と戦争」についてのこの問いかけを母に向けることはできなかった。

母はリンパ癌で闘病の後、二〇〇七年二月に九〇歳で亡くなった。生前に母が戦争に対して持っていた内面の感情や思い、父の戦死を聞いた時どのような思いだったのかを充分に聞き取れないままだった。

私の靖国問題についての関わりは靖国合祀取消訴訟からだった。参加したのは母の死後であり、母の遺品のなかから靖国神社合祀通知を見つけ、「こんな紙一枚が父を神にしたのか」とほんとうに腹立たしく思った。そして訴訟参加を決断した。靖国合祀取消訴訟は二〇〇六年年八月に大阪地方裁判所に提訴され、私は一年遅れで翌年二〇〇七年八月に裁判に合流した。

訴訟は二〇一一年一一月三〇日に最高裁で敗訴したが、裁判で原告だった戦没者遺族と裁判終結後に参加した遺族で「合祀イヤです・アジアネットワーク」を組織し、毎年靖国神社に「合祀取り消し」を求めた要求行動を続けてきた。靖国神社の回答は「合祀取り消しは認められない。」という定型的なものだが、私たちが遺族であるため、靖国神社は毎回一時間ほどの応接をしてきた。申し入れ行動は昨年までで一一回行ってきた。今年も一二回目の申し入れ行動を九月に予定している。

父の残した椅子

昨年九月一九日に合祀イヤです・アジアネットワークによる靖国神社への一一回目の合祀取り消し要求行動があり、以下が私の合祀取り消し要求書である。

「わが家には父の遺した古い椅子がある。松の木からできていて、濃い茶色というよりも黒に近いごつごつした感触の椅子で、持ち上げるとずっしり重い。この椅子は亡くなった母がとても大事にしていた。母が暮れの大掃除の時に玄関上の高い所を拭く際にはかならず台にしていた。「これはお父ちゃんが作ったものや」は母の口ぐせだった。

父は大工だった。今、手元に一葉の写真がある。戦前のわが家の棟上げ式の写真で、背後に神棚があり、白い装束の三人の神官を真ん中に、右に黒い着流しを着たまだ二〇歳代の父がいる。一緒に家を建てた大工仲間が左に二人写っている。頭上には一抱えもある梁が四本見えている。母はこの梁も自慢で、家に来た近所の人にいつも誇らかに語っていた。父は二度も戦争に召集され、中国侵略軍（天皇の軍隊）の一員として戦死した。そのアジア・中国侵略と戦争の推進に加担した靖国神社から父を取り戻したい。父の合祀を取り消し、霊璽簿から父の氏名等の抹消を求める。」

一〇月一九日付けで、靖国神社から「合祀取り消し要求書」への回答が来た。予想どおり木で鼻をくくった回答だった。

「当神社の祭神合祀は、当神社の極めて重要な宗教行為であり、当神社の自主的な判断に基づいて決せられるべき事柄であって、そのことにより他者の法的利益が侵害されることはないと理解しております。よって、松岡徳一命の合祀取り消しに関する貴殿の要求には添いかねますので、その旨御回答申し上げます。」

この回答は他の遺族に対しても毎回全く同じ内容であり、いつも怒り心頭に発するが、父をわが元に取り戻すまで合祀取り消し要求行動を他の遺族と共に続ける覚悟だ。

おわりに

自衛隊幹部の靖国神社参拝の報道を知り、そのねらいが日本に戦争が起こった時の靖国合祀にあると直感した。そこから、父の戦死と靖国合祀、私の靖国神社遺児参拝体験と記憶を辿って来た。

日本から戦争をなくすためには、現在も起こり得る「靖国神社と戦死者の合祀」の危険を考えることが重要と考えた。戦後、戦死者の靖国合祀はなかったが、今後も靖国合祀をさせないことが日本から戦争をなくすことにつながると考えた。

世界ではウクライナ、パレスチナと止めどなく戦争が続き、台湾有事が叫ばれている。また日米軍事同盟の強化がなされ、日本の軍事化、特に沖縄、南西諸島の軍事化が強められている。このような戦争の危機の時代の将来、自衛隊に戦死者が生まれ、靖国神社に祀られることがないように、反戦・平和のための市民的運動が必要と思う。

（２０２４年7月）